

# 恵解山古墳

—第8次調査の概要—

2008

長岡京市教育委員会

編集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

## はじめに

国史跡 恵解山古墳は、乙訓地域最大の前方後円墳で、前方部に700点以上の鉄製武器類を納めた副葬品埋納施設をもつ全国的にも貴重な古墳です。

長岡京市では、この優れた文化遺産を将来にわたって守り伝え、同時に市民に広く開放し活用を図るための保存整備計画を進めています。保存整備計画は、平成15年度に基本構想を、平成17年度には保存整備や活用の指針となる基本計画を策定しました。そして、平成18年度からは事業の具体化に向けた保存・整備委員会を立ち上げ、様々な角度から恵解山古墳の保存整備と活用の方法を検討しているところです。さらに、この事業の基本姿勢が市民との協働にあるため、毎年「恵解山古墳特別講演会」を開催し情報発信に努めるとともに、「恵解山古墳を愛する人」を募集し、今後の古墳活用にあって核となる組織に育成していきたいと考えています。

さて、本書にまとめた恵解山古墳第8次調査は、平成19年度に国庫補助事業として実施しました。この調査では前方部東側面で埴輪列を確認し、西側くびれ部では良好な保存状態の葺石を検出するなど、古墳の復元整備を行う上で大きな成果が得られています。恵解山古墳に対する理解を深めるとともに、郷土の歴史学習資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご協力をいただきました近隣の皆様方、貴重なお指導をいただきました諸先生方、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関に紙面をお借りして深く感謝いたします。

平成20年3月

長岡京市教育委員会  
教育長 芦田 富 男

## 例 言

1. 本書は、平成19年度に国庫補助事業として実施した恵解山古墳第8次（長岡京跡右京第920次）調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、平成19年11月1日から平成20年2月29日まで行った。調査面積は、合計272m<sup>2</sup>である。
3. 調査は、長岡京市教育委員会から委託を受け、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。
4. 表紙の写真は、8-2調査区検出の西第3斜面くびれ部葺石である。
5. 本書の執筆は埋蔵文化財センター 岩崎 誠が担当し、編集には山本輝雄の協力を得た。
6. 掲載写真には、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に依頼したカットが含まれている。

## 目 次

1	位置と環境	3
2	調査経過	4
3	第8次調査調査の成果	7
	8-1 調査区	7
	8-2 調査区	8
	8-3 調査区	9
	8-4 調査区	11
	8-5 調査区	11
	8-6 調査区	12
	8-7 調査区	13
4	まとめ	14



平成19年10月3日現在の現況風景  
(長岡京跡右京第914次調査時)

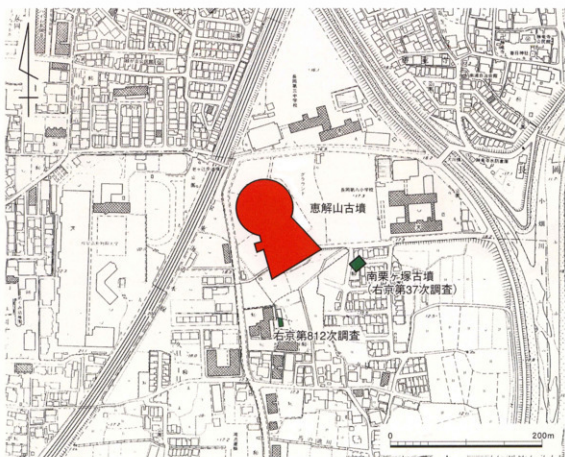
第1図 惠解山古墳全景

## 1 位置と環境

惠解山古墳は、JR長岡京駅の南約1kmにある。所在地は、京都府長岡京市勝竜寺1205から久貝二丁目813他である。当古墳は、京都府山城盆地の西部を南流する桂川の右岸城で最大規模の前方後円墳である。地理的には、山城地域から大阪平野に流出する淀川上流域にあり、桂川の支流の一つである小畑川と、北西から流れ込む犬川の合流点の西側にある。そこは、山城地域にあっては、南の要となる地点と言える。古墳の西側には、北東-南西方向にJR東海道本線が通過する。立地は、北西から降る低位段丘の先端部付近で、標高約16mの平地に築かれている。

桂川右岸の古墳時代首長墓系譜は、長岡、向日、樫原・山田の3グループに区分されている。長岡グループの前方後円墳は、惠解山古墳の前段階に今里車塚古墳がある。その後、少し間をおいて、塚本古墳から舞塚古墳へと続く。5～6世紀にかけてのこの間、4世紀に栄華を極めた向日グループに5世紀の前方後円墳が見られなくなる現象が見られる。また惠解山古墳後の空白時期には、樫原・山田グループに5世紀後葉の穀塚古墳が築かれている。都出比呂志は、この現象を、全国レベルの政変を背景とした、盟主的首長系譜の移動と考えている。

当古墳は、昭和55(1980)年に鉄製品埋納施設が見つかり、昭和56(1981)年に、国の史跡に登録された。



第2図 惠解山古墳の位置 (1/5000)



## 2 調査経過

今回の恵解山古墳第8次調査は、長岡京跡の右京第920次調査でもある。周辺部の調査では、右京第37次調査で5世紀中葉の埴輪をもつ南栗ヶ塚古墳（方墳）が検出され、右京第812次調査では、大きな落ち込みから、恵解山古墳とあまり時期差がない5世紀前半の埴輪片出土が報告されている（第2図）。前方部の南に近在するこれらの古墳は、恵解山古墳の陪塚の可能性が指摘されており、当古墳との関連を知る上でも重要な存在意義をもつ。

今年度の調査区は、当初、西側くびれ部の裾に8-1調査区、西側くびれ部の第2段テラス面から第3傾斜面葺石の想定位置に8-2調査区、前方部の東側第2傾斜面と第2段テラス面から第3傾斜面想定位置に8-3調査区、東側造り出しの南辺想定位置に8-4調査区を設定した。また、追加調査区を、次の3箇所を設定した。周縁の外形と範囲を明らかにする目的で、周縁南西隅に8-5調査区、西辺部に8-6調査区を設定し、また後円部の墳丘範囲を確認するために後円部西裾推定位置に8-7調査区を設けた。

まず、最初に実施した4箇所の調査区についてみる。8-1調査区から8-3調査区の調査前は、孟宗竹に覆われているため、竹の伐採作業から取り掛かり、調査区を設定した（第3～5図）。8-4調査区は、当古墳の東に設けられた狭小な公園内にある（第6図）。先年度までの調査区との位置関係は、以下ようになる（第8図）。8-1調査区は、平成17年度実施の第6次（長岡京跡右京第859次）調査6-1調査区の北東に取り付け位置である。6-1調査区では、くびれ部裾の葺石が検出されており、その上部がどのような構造になっていたのかという手掛かりを求める



第3図 8-1調査区調査前風景（西から）



第4図 8-2調査区調査前風景（北から）



第5図 8-3調査区調査前風景（東から）



第6図 8-4調査区調査前風景（東から）

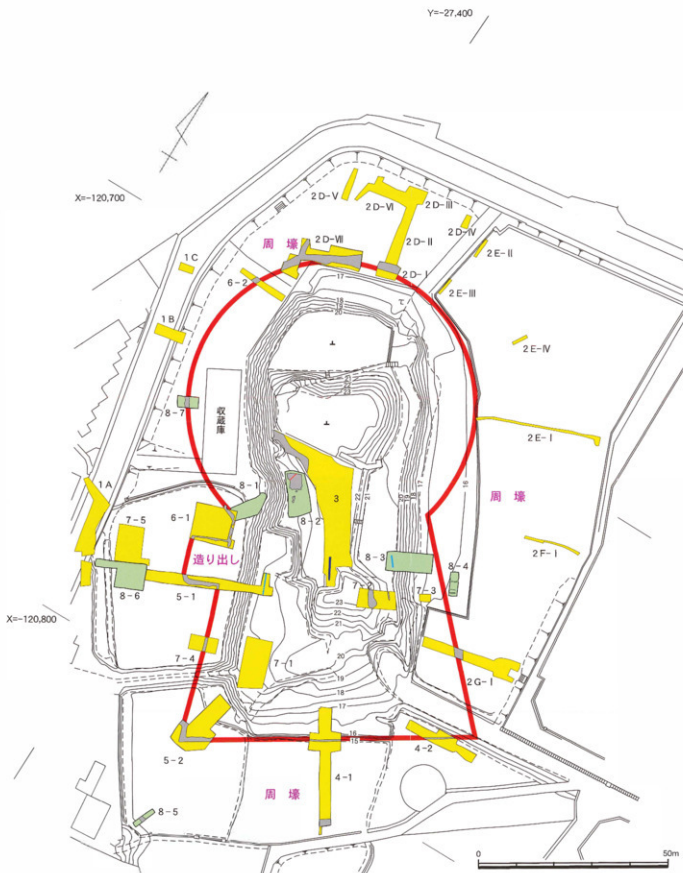
調査区である。8-2調査区は、第3次調査（昭和55年度実施）におけるくびれ部葺石検出箇所  
の南側である。ここでは、第3傾斜面葺石のくびれ部基底石位置を明らかにし、第2段テラス面  
の埴輪列位置を明らかにする目的を持っている。8-3調査区は、平成18年度実施の第7次（長  
岡京跡右京第893次）調査7-2調査区と7-3調査区の北側である。ここでは、前方部東側の第  
2段テラスと埴輪列の位置や、その上下斜面の葺石位置を確認する目的が与えられている。8-  
4調査区は、第7次調査7-3調査区の東側である。ここでは、西側で検出された造り出しが、  
東側の対象位置にあるかどうかを見る役割が  
与えられている。

追加調査として実施した3箇所調査区の  
調査前は、8-5調査区と8-6調査区が水  
田跡地であり、8-7調査区は盛土整地され  
た所である（第7図）。先年度までの調査区  
との位置関係は、以下のとおりである。8-  
5調査区は、平成16年度実施の第5次調査  
5-2調査区の南に位置する。5-2調査区  
では、前方部先端西角が検出されており、周  
境南西角がそれに対応して屈曲するかどうか  
を確かめる目的がある。この地点には、農耕  
用水の井戸やポンプアップ施設があり、計西  
通りの調査面積を確保できなかった。8-6  
調査区は、第5次調査5-1調査区の西端延  
長部であるとともに、第7次調査7-5調査  
区の南に接している。7-5調査区では、周  
境の西肩と考えられる塚の上がり部分が検出  
されているが、長岡から平安時代頃の流水堆  
積の砂礫層が複雑にあり、後世の削平を受け  
ていないか、明らかにする目的がある。8-  
7調査区は、第6次調査6-2調査区と6-  
1調査区のほぼ中間地点に位置する。ここ  
では、後円部の西裾の位置を明らかにし、後円  
部径の規模を再確認する目的が与えられて  
いる。

このように、今回の調査は、8-1～7調  
査区の7箇所調査区を設け、それぞれの調  
査区毎に重要な目的を持って実施した。



第7図 8-5・6・7調査区調査前風景（垂直）



第8図 恵解山古墳の調査地位位置図 (1/1000)

### 3 第8次調査の成果

#### 8-1 調査区

当調査区は、墳丘図で見られるように、等高線が大きくくびれに沿って墳丘側に入り込んでおり、かなりの崩壊状況が予想された。しかし調査区南辺に僅かでも痕跡が検出できないか、期待できた。ところが、近・現代の掘削は全面に及んでおり、古墳盛土の一部が残存する程度であった(第9図)。調査区南西部は、現表土下に薄い近現代遺物を包含するシルト堆積があり、その下は段丘礫地山層と考えられる青灰色系の硬く締まった無遺物礫層であった。南西部中央には、農業用の井戸と思われる直径約2mの円形掘り込みSK11がある。埋土から、染付茶碗などが出土した。墳丘側では、青灰色系の礫層上に、古墳築造前の旧表土と思われる黒色系の硬く締まった粘土層があり、その上に古墳盛土と考えられる白色系の締まった土層堆積が数層見られた。古墳盛土と考えられるこれらの堆積は、墳丘側の立ち上がる傾斜崖面に向かって入り込んでいく様子を確認した。崖面裾には、染付陶磁器などを包含する溝が掘られており、北東隅は深い掘り込みになっていた。この掘り込みは、現代まで窪んだ状態で、そこを大量の礫で埋め尽くされていた。現地表面にまで達するこの礫堆積には、人頭大のものから拳大のものを含んでいたが、ほとんどは直径10cm前後の垂角礫であった。礫の間は空洞で、土や砂が挟まれている状況ではなかった。当調査区の墳丘側南部は、ほぼ水平な面にまで削平を受けた古墳盛土と考えられる土層の上に、竹藪客土が厚く盛られていた。この竹藪客土内には、人頭大から、それよりやや小振りな礫がまともまっている部分も見られたが、竹藪客土の土留め目的の施設と思われる。

古墳に関係する遺物には、埴輪片と竪穴式石室に用いられたと考えられる結晶片岩破片がある。埴輪の破片は各層から出土したが、大きな破片は、主に調査区北西の窪みに埋め立てられた礫層と、調査区南東部の竹藪客土からの出土が多い。埴輪には、円筒の他、蓋形などの形象埴輪も含まれている。また、窪みを埋め尽くした礫や竹藪客土から出土した礫は、本来当古墳の葺石に用いられていたものも多いと思われる。



第9図 8-1調査区全景(西から)



## 8-2 調査区

本調査区では、北半部で、予想通りの見事な第3傾斜面葺石を検出した(表紙、第10・11図)。南半部は、葺石の損失が激しかった。しかし、傾斜面はほぼ構築当時の姿と考えられる。また、そこに使用されていた礫が、本調査区の西裾に設けた8-1調査区に集められていた可能性は大きい。残存葺石の上には、葺石崩落礫層とそれを覆う土層堆積が見られた。この両層からは、埴輪の出土量が多く、円筒埴輪や蓋形・盾形・甲冑形などの形象埴輪も出土した。また、竪穴式石室石材と考えられる結晶片岩の破片も多数点出土した。前方部側葺石面傾斜角は、約26度を測る。

葺石は第3次調査で検出された様相に類似し、くびれ部に40cm前後の大きな礫を用いて列をなし、他の傾斜面に築かれた葺石面より突出している。また、葺石基底石が前方部側で検出できたことは、新たな成果である。

今回、第3傾斜面葺石基底石の位置を検出できたことは、第5次調査検出の第2段テラス面に樹立していた埴輪列とともに、前方部西側の中間段復元に、大いに寄与する貴重な成果といえる。



第10図 8-2調査区全景(南から)



第11図 くびれ部から前方部にかけての葺石(南から)

### 8-3 調査区

当調査区では、前方面東側の第2段テラス面に樹立する埴輪列を検出した(第12図)。埴輪は、直線に掘られた素掘り溝に、約35cmの埴輪心々間隔で9本が整然と立て並べてあった(第13図)。

当調査区では、埴輪列の東にあるはずの第2傾斜面以下の構造は、後世の大きな開削によって完全に失われていた。樹立埴輪は黄色系の土層で覆われていたが、この層には、破砕した埴輪片が包含されていた。その上には、拳大からややそれより大きめの礫層が被覆していた。礫層内には、近世の土器や火葬骨が少量包含されており、江戸時代の堆積と考えられる。とはいえ、この礫層は、第3傾斜面に構築された算石を起源とするものであろうと考えられる。さらに上には、灰黄色から白色系の斑紋をなす硬く締まった粘土層が南西部に厚く堆積していた。この土層は、古墳盛土起源と考えられ、後世に攪拌を受けた形跡が希薄であろうと考えられることから、地滑りなどにより一気に埋まった可能性がある。この堆積は、7-2調査区でも観察されている。この土層堆積により北に大きく傾斜する状況が生まれているが、その傾斜面から北の低まり部分に、黒色土堆積があった。この土層は、北端で厚さ40cmを越え、炭や火葬骨細片が多く含まれていた。また近世の土師器皿や寛永通宝の六道銭なども包含しており、江戸時代の墓地整地土層と考えられる。7-2調査区では、古墳盛土起源の堆積層下に、多くの近世墓塚を検出されており、光林寺(右京第207次調査)の調査での土葬墓から火葬墓への変遷過程との関連が興味深い。これより上の堆積は、近現代の墓地造成盛土が主となる。

埴輪列を検出した第2段テラス面より東は、近世以後の削平が周壕底の推定標高まで及んでおり、段丘礫と考えられる青灰色系の礫層を、耕作土と考えられる黄褐色系のシルト層が覆っていた。この層からは、靱形埴輪などが出土した。その上には、古墳盛土起源と考えられる硬く



第12図 8-3調査区全景(西から)

締まった白色系の粘土層が厚く堆積していた。この層には、平安、鎌倉、室町時代の土器類に混じり、円筒や形象の埴輪片や鉄製品が包含されていた。鉄製品には、剣・鎌の他、鉄斧・鋤鍬類・鎌・鍬・刀子等の農具類もある。鉄剣には、鞘に収められていた状況を示す木質が残るものもある。これらの鉄製品は、第3次調査（昭和55年度実施）の鉄製品埋納施設から出土した刀剣類に類似し、保存状態も似ていること、また出土層が古墳盛土起源の土層と考えられることから、本来は当古墳に埋納されていたものと考えられる。但し、埋納位置は、第3次調査検出の埋納施設であった可能性を完全に否定できないが、鉄斧等の農具類が多く含まれていることから、それとは別の埋納施設があったという見方が妥当と考えられる。この層を掘り込んで、調査区東端に近現代の水田耕作にからむ用水用の素掘り溝S D09がある。この溝内堆積の最下層には砂があり、埋土には染付磁器などが包含されていた。この層より上には、締まりなく崩れやすい白色系の粘土層が堆積していた。この層も、本来は古墳盛土起源と考えられる。

埴輪列は、全て第1段突帯からやや上までの残存状況であった。埴輪樹立に際し、幅約50cm、深さ約16cmの溝を掘り、各埴輪樹立に適した掘り足しや埋め戻しを行い、第1段突帯の深さまで埋め込んで、ほぼ等間隔に整然と立て並べられていた。この埴輪樹立溝内の埋土には、遺物は全く含まれていなかった。埴輪内の土層は、底から約10cm前後埋め戻して安定させていた。この層には、埴輪片などの遺物は全く含まれていなかった。これより上の堆積は、各埴輪の上部が壊れていく過程で自然に堆積したものと考えられる。この堆積層には基本的に各埴輪の上部破片が落ち込んでいるものが多かったが、中には、別個体埴輪の底部片が入り込んでいるものもあった。また、拳大以上の礫が落ち込み、その石が内側から強い力で押し込んだため、部分的に割れて外に押し出されているものや、上から礫が被さり、上部を破壊しているものなどもあった。樹立埴輪の外周調整には、タテハケ調整で仕上げたものが1個体あるほか、他は全てタテハケ後にヨコハケ調整する手法のものであった。今回検出した埴輪列の範囲内では、樹立に際して、透かし孔の方向に配置法則は認められなかった。また、調査区西半部に残存する古墳盛土内からは、弥生時代後期の土器の小片が僅かながら出土した。



第13図 8-3調査区検出埴輪列（東から）

## 8-4 調査区

当調査区では、今までの調査で明らかになった西側造り出しの対称位置に、東側の造り出しがあるかどうかを探る目的があり、東側造り出し南辺想定位置に調査区を設定した(第14図)。

調査区内の土層は、厚い盛土下に水田耕土があり、耕土は段丘礫と考えられる礫層を覆っていた。この礫層は、調査区南部で北東-南西方向に肩を持って南に僅かに傾斜していた。南へのこの傾斜部分には、古墳周壕内最下層に類似する黒色粘土が薄く堆積していた。この層の上面には、長岡京期から平安時代頃の遺物が出土し、黒色粘土層内には埴輪片が包含されていた。南への僅かな傾斜(落ち込み)の方向や位置は、東側造り出し想定に沿うものである。しかし、5-1調査区や6-1調査区で検出された西側造り出しのように葺石やその崩落石と考えられる礫群は見られなかった。当調査区で検出した落ち込みの最も深いところで、標高約14.98m、落ち込みより北の最も高いところで、標高約15.30mである。これと対称位置に当たる5-1調査区では、墳丘裾葺石基底石の標高は約15.05mである。この比較と、当調査区検出のこの僅かな傾斜に葺石が伴っていない点を重視すれば、東側造り出しに関係する傾斜でない可能性もある。従って、今回の調査成果をもって、東側造り出しの有無を結論付けることは避けたい。

当調査区では、他に、落ち込みの肩付近から傾斜部にかけての位置で、直径約1.7mの円形土坑S K 12を検出した。埋土は上層の薄い砂礫と、下層の厚い黒色粘土に分けられ、下層から弥生時代後期の土器が出土した。



第14図 8-4調査区全景(東から)

## 8-5 調査区

当調査区では、北西-南東方向に肩を持つ北東方向への落ち込みを検出した(第15図)。傾斜面には、段丘礫と考えられる青灰色系の礫層上に拳大の礫が散見できた。このような状況は、4次調査4-1調査区南端の周壕南端部検出状況に酷似する。今回検出した周壕南西隅の落ち込み状況と、4-1調査区の成果との比較から、周壕の南西隅が緩やかな弧を描いていた可能



第15図 8-5調査区全景(北東から)



性が指摘できる。とはいえ、今回の8-4調査区は狭小な調査区であるため、確定はできない。周壕内埋土は、黄褐色系の上層と、黒色系の下層に区分できる。但し、両層からは長岡京期から平安時代頃の土器が出土し、明確な堆積時期差を考へにくい。また、傾斜面礫散乱部分では、礫堆積を覆う砂礫層から、平安時代頃の土器類が出土した。

## 8-6 調査区

当調査区は、第7次調査7-5調査区同様に、広い範囲にわたって平安時代の砂礫層堆積を再確認した(第16図)。この砂礫堆積は、洪水時などの流水堆積と考えられ、周壕西辺のあたりに固有な土層堆積である。また、周壕西辺のあり方も、大阪層群と考えられる黄色から白色系粘土層が基盤層になっており、7-5調査区の基盤層と変わらない。西から緩やかに傾斜して周壕となる傾斜面には、葺石崩落石のような礫群は見られなかった。このあり方も、前方部側の周壕南辺に見られる状況と、甚だしく異なる。この調査区での新たな課題として、7-5調査区や5-1調査区より西の状況把握を試みた。しかし、当調査区西端部には、現代の池による掘削深度が深く、大きく削平されていた。池の東辺には杭と矢板による護岸用土留めが構築されていた。このように、周壕の西肩検出位置より西側の状況は捉えきれなかった。前方部側の周壕南辺に見られた礫の散乱状況がここで見られないのは、長岡京期や平安時代の砂礫堆積に起因する流水により、完全に損失してしまったのか、あるいは、本来の周壕西肩がさらに西にまで広がるのか、または南辺で見られる礫の散乱状況が人工的なものでなく、段丘礫からの崩落であるのか、今回の調査でも結論付けることができなかった。当調査区出土遺物には、平安時代前後の土器以外に、砂礫層を掘り込む土層に鎌倉時代の土器類が包含されていたほか、各層から埴輪の細片が出土した。



第16図 8-6調査区全景(北西から)

## 8-7 調査区

当調査区では、後円部裾をほぼ推定位置から検出できた。調査区内での後円部裾は、段丘礫と考えられる青灰色系の礫層を掘削して第1傾斜面を築き、その礫層面に直接、葺石を構築している。葺石は、幅約1mの範囲で検出した。葺石に用いられた石の大きさは、15~20cm前後のものが多い。明確に原位置を留める基底石はなかった。しかし、30~40cm前後の礫が傾斜面からやや周壕側に入り込んだ位置に不規則に散乱している様相がうかがえ、これらの一回り大きい礫が、基底石として用いられていた可能性が大きい。本来、傾斜面の裾に並べ置かれていたものが、周壕側に滑り込んだものと思われる。

周壕内堆積は、葺石を覆う葺石崩落礫層と、その上に薄い黒色系粘土層堆積があり、さらに上には黄褐色系の粘質土が堆積していた。これら各層からは、埴輪片が少量出土し、周壕埋土上層からは、10cm程度の比較的大きな円筒埴輪破片が見られた。また、崩落礫層を覆う粘土層より上からは、平安時代前後から鎌倉時代にかけての土器類も包含されていた。黒色系粘土層からは、木片なども出土したが、加工品と明確に分かるものはなかった。このような周壕内堆積は、周壕西辺部の7-5調査区や8-6調査区を除く周壕部調査の状況と矛盾なく、共通している。

調査区東端の後円部墳丘側は、白色系と黄灰色系の墳丘盛土と考えられる土層の一部を検出した。他の調査区の墳丘側では、黒褐色系の粘土層が墳丘盛土下面にあることが多い。この墳丘盛土下の土層は、古墳構築時の表土層と考えられている。今回の調査でも、8-1調査区と8-3調査区において、この従来の考えに沿う状態で検出した。しかし、当調査区では、墳丘盛土と考えられる土層の下は、周壕底面から葺石構築傾斜面を構成する青灰色系の礫層が基盤となっている。この違いは、古墳構築時の旧地形が、後円部側に高く、前方部側に低かったことに起因するものと思われる。この想定は、北西から南東に低位段丘が張り出す立地条件からも、合理的な解釈と考えられる。

なお、後円部墳丘側の傾斜面中位に、後円部の円弧に沿うように掘られた溝を1条検出したが、層位関係から古墳より新しい時期のものと考えられる。

当調査区全体を覆う土層は、旧水田耕土と造成盛土である。



第17図 8-7調査区全景(西から)

#### 4 まとめ

今回の恵解山古墳第8次調査では、先年度までの調査成果も含めて、総体としてみた場合、2つの大きな成果項目をあげることができる。

第1に、前方部第2段テラス面と第3傾斜面を具体的に復元想定することができる有力な根拠を得ることができた。その根拠とは、鉄製武器類を主とした埋納施設の中軸線を古墳の中軸線とした場合、以下の3点で、合理的整合性が見出せることである。つまり1点目は、今回の8-3調査区で検出した前方部東側第2段テラス面の埴輪列は、第5次調査5-1調査区の前方部西側第2段テラス面埴輪列と対称位置にあることである。2点目は、8-2調査区で検出した前方部西側第3傾斜面の葺石基底石位置と、第7次調査検出の前方部第3傾斜面葺石基底石が対称位置にあることである。3点目は、第6次調査の6-1調査区で検出された西側埴丘裾のくびれ部位置と、第3次調査検出の西側第3傾斜面葺石くびれ部列石を結ぶ直線上に、今回の8-2調査区で検出した第3傾斜面葺石のくびれ部列石が見事に重なることである。この成果は、史跡公園の整備における埴丘形態復元に、大いに寄与するものと思われる。また、他の前方後円墳との形態比較も、より確かな根拠をもって検討できる。

第2に鉄製品埋納施設が、昭和55年に発見された武器類を主とする埋納施設とは別に、農工具類などを主に納めた埋納施設が前方部側のどこかにあった可能性が生じた。武器類を主とする埋納施設と農工具類を主とする埋納施設を別に設け、併設した例は、藤井寺市西墓山古墳などにもある。



第18図 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いげのやまこふんだいはちじちようさがいほう
書名	恵解山古墳第8次調査概報
副書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第52冊
編著者名	岩崎 誠
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
恵解山古墳	長岡京市		200	34°54'39"	135°42'2"	20071101 ↓ 20080229	272m <sup>2</sup>	保存整備
長岡京跡	勝竜寺1205-2	26209	107					
南栗ヶ塚遺跡	他		103					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恵解山古墳 (第8次)	古墳	古墳時代	前方部東側第2段壇輪列と西側第3傾斜面葺石、後円部西裾葺石と周壕	円筒埴輪、形象埴輪 結晶片岩 鉄製農具類、鉄剣、鉄鏃	前方部第2段壇輪列の巡る位置と、第3傾斜面の葺石位置などを具体的に復元する根拠を得た。 鉄製農具類中心の埋納施設のあった可能性が生じた。
長岡京跡 (右京第920次)	都城	長岡京期		土師器、須恵器	
南栗ヶ塚遺跡	集落	弥生時代 平安時代 鎌倉時代		弥生土器、サスカイト剥片 土師器、須恵器 土師器、瓦器、須恵器 火縄銃鉛弾	

恵解山古墳第8次調査概報  
長岡京市文化財調査報告書 第52冊

平成20(2008)年3月28日 印刷

平成20(2008)年3月31日 発行

編集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

電話 075-955-3622(代) FAX 075-951-0427

発行 長岡京市教育委員会

〒617-0851 京都府長岡京市園田一丁目1-1

電話 075-951-2121(代) FAX 075-951-8400

印刷 株式会社 ダイ

〒604-8241 京都市中京区三条通新町西入ル釜座町22

ストークビル三条烏丸4F

電話 075-254-0646 FAX 075-254-0647